

氏名(本籍)	鈴木 瑠璃子 (宮城県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第2332号		
学位授与年月日	平成20年1月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	A Poetic-Cultural Transference in Wordsworth (ワーズワスにおける詩的・文化的転移)		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	荒木正純
副査	筑波大学教授	博士(文学)	江藤秀一
副査	筑波大学准教授		佐野隆弥
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	山口恵里子

論文の内容の要旨

本論文は、イギリス・ロマン派の代表的詩人ウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth) の詩作品が、想像力をかいして社会共通の言語文化を形成しようとする詩人の願いの表現であり、生涯修正に修正をかさねた自伝的代表作『序曲』(*The Prelude*) がその企図の中核にあるとする立場から、修正過程にみられる詩人の思考のゆれとその軌跡を追究したものである。論文の構成は、以下のとおりである。

Introduction

- Chapter 1 A Personalised Attempt to Overcome the Split between Subject and Object
- Chapter 2 Wordsworth and the Word Culture
- Chapter 3 Forms of Poetic Imagination in Wordsworth
- Chapter 4 The Transmutation of "The Discharged Soldier" under Social and Political Ideology
- Chapter 5 Translation in the 1790's
- Chapter 6 Unacknowledged Acceptance of Authority of Schlegel by S. T. Coleridge
- Chapter 7 The Idea of 'the real language of men' in the 1800 'Preface' to *Lyrical Ballads*
- Chapter 8 Refusal of the Metamorphosis Theme in "Nutting"
- Chapter 9 Is the Sentimental Sublime Compatible with a Didactic Voice?
- Chapter 10 A Mode of Cultural Transmission
- Chapter 11 The Lucy Prototype in *Poems* 1790
- Chapter 12 Symbiosis of Two Romantic Narratives on the Chivalric Past

Conclusion

序章では、ワーズワスが生涯修正に修正をかさね、生前は未刊のままであった自伝的代表作『序曲』(*The Prelude*) の1805年版(13巻)の第7巻にふされた第二の前口上をとりあげ、そこに描かれたロンドンの非人間化した群衆の雑踏、および事象や思想の容体化の描写が、いかに文化・社会的状況に応じて変貌する動的な詩人ワーズワスを示唆しているかを分析・解説し、もって論文全体の問題提起とし、論文の概要を説明

している。

第1章は、ワーズワスが、主体と客体との間隙をいかに克服しようとしたかを追究している。彼の想像力論は、18世紀に流行したミメシス論、放射論、そして表現論を自分なりに咀嚼したものであったが、次第に、ハートレイの概念連合論をもとにした客体描写論へと移行していくとしている。

第2章は、ワーズワスが、'culture'という語をどのように使用したかを追究している。『抒情歌謡集』(*Lyrical Ballads*, 1798)にみられた民衆の生活様式とその純粋な魂への共感の姿勢は、『逍遙』(*The Excursion*, 1814)では消え、アーノルド的「教養」意識が支配的になる。この間に生成された『1805年版序曲』(*The Prelude*)では、'culture'が民衆への共感をもつ今日的な「文化」の意味に使用されていると分析している。

第3章は、ワーズワスの詩的想像力がいかに変化したかを、『序曲』の「時の点」(Spots of Time)のエピソードにくわえられた変更を分析することによって追究している。『1805年版序曲』以降、このエピソードは大きく変化し、『2巻本序曲』(1799年)の自伝的枠組みは消え、読者介入を許す場が形成された。この変化は、1790年代、ワーズワスやコールリッジらが共有した人類救済のヴィジョン「一つの命」(One Life)が変質し、「永遠に存在しかけようとしている何か」の探求を詩の目的にするようになったからだとしている。

第4章は、社会的・政治的イデオロギーによって、どのように「除隊させられた兵士」(The Discharged Soldier)のエピソードが変貌したかを追究している。このエピソードは、独立した詩篇から『1805年版序曲』へ編入され、更に『1805年版序曲』に持ち込まれたが、その過程で意味が変化し、激しい社会悪糾弾の姿勢から、ヴィクトリア朝の国教会的な諦念と慈善精神礼賛へと変化したという。

イギリス・ロマン主義の形成にとって、ドイツ語テキストの翻訳は大きな役割を果たしたが、第5章は、1790年代、ワーズワスの翻訳論がいかなるものであったかを追究している。当時支配的であった自由翻訳論は、原典に似たテキストを創造的に生産することを許していたが、言語は魂の純粋な放射であるとするワーズワスは、原典と同一のテキストを生産することを主張したとしている。

第6章は、翻訳の問題から、コールリッジのシュレーゲル受容の問題が扱われている。シュレーゲルを翻案した彼のテキストは剽窃だとされてきたが、それは、翻訳は独創性を伴わない想像力によるものとする彼の姿勢の帰結であるという。また、彼のシェイクスピア再評価をめぐる公開講義には、シュレーゲルとは異質の要素がみられ、それはコールリッジ独自のものではなく、ド・ラモットやヒュー・ブレアに影響されたヨーロッパ共通の文化的基盤にもとづくものという。

第7章では、『抒情歌謡集』1800年版の「序」における、詩は民衆の現実の言葉をもとにすべしとするワーズワスの考えをめぐり、それは、コンディヤックの人間中心的言語観に由来する、国教忌避者エンフィールドの言語観にもとづいていたとしている。

第8章は、ワーズワスが「はしばみ採り」(Nutting)で「変身」を拒否した理由を、コールリッジと対比させ追究している。コールリッジは、『クリスタベル』(*Christabel*, 1816)でジェラルディンを「変身」させ、神性と悪の共存する層を形成しようとしているが、ワーズワスは「変身」の概念を拒否し、外的日常世界と内的自我との共存、ひいては生と死とが共存する稀な瞬間の可能性を追求しているとしている。

礼賛していたマクファーソンを、ワーズワスは1815年には完全に否定するにいたった。第9章では、それがどのような経緯によってなされたかが追究されている。ケルト学者によるマクファーソンの『オシアン』(*The Poems of Ossian*, 1762-3)贋作説が支配的になったこと、ワーズワス自身が、詩は情熱の発露であるとするブレアの立場に反発するようになったこと、さらに、崇高性と日常性が一致しないとする立場を拒否するようになったことなどによるとしている。

ワーズワスのスコットランド知識人との関わりは、ブレアやマクファーソンだけでなく、劇作家ジョアナ・ベイリーにも認められる。第10章は、ワーズワスとベイリーがいかなる関係にあったかを追究している。ワーズワスは、客観的な視点から教訓的な表現をした彼女の企図は認めるものの、歴史を家庭的な立場から扱っ

たり、女性支配による平和と秩序の維持を主張したりすることには反発したという。

第11章は、『1790年詩集』(Poems)の自然と一体化した「ルーシー」像の原型が何に由来するものかを追究し、それがベイリーに由来するとしている。この「ルーシー」像は『オシアン』にみられるものであるが、ベイリーのバラッドによってはじめて、ワーズワスの一連のルーシー詩篇が成立したからであるという。

第12章は、ウォルター・スコットと対比し、ワーズワスがどのように、騎士道華やかかなりし過去を題材とするロマンスを生成したかを追究している。18世紀以降、歴史が次第に学問的に体系化されていくなか、ロマン主義的に過去を再構築しようとする気運がおこった。スコットは『最後の吟遊詩人の歌』(The Lady of the Last Minstrel, 1805)を、ワーズワスは『リルストンの白鹿』(The White Doe of Rylstone, 1808)を書いたが、前者は、ジャコバイトの乱以後衰退するスコットランド文化に対する誇りの回復を企図し、後者は、神秘的な白鹿に、宗教の対立を超えた精神的な交流を象徴させ、歴史の具現化を図ったとしている。

結章では、ワーズワスにとって、詩は、想像力によって時間・空間を変形し、不可視を可視とする超越的な場であり、一般読者との交流を図ると同時に、改訂者としての詩人・自己も、読者として参加可能な過程の言語化であるという立場を提示し、論文全体のまとめをしている。

審査の結果の要旨

従来のワーズワス研究は、多数の手稿本を校合することによって決定版を確定する文献学的なものが中心で、その代表的成果はコーネル版『ワーズワス全集』であった。また、生涯修正が反復された未完成の『序曲』に関しては、1799年の2巻本、1805年の5巻本、または13巻本、あるいは1850年版として死後出版された14巻本のいずれかに依拠し、美的読解にもとづく価値評価に終始する傾向が顕著であった。フランス大革命の大義に人類救済のヴィジョンをみた1790年代から、ナポレオンの出現によって引き起こされた大義の変質に失望したワーズワスは、その詩論のモデルをアリストテレスのミメシス論からハートレイの科学的観念連合論へと移行させたが、そこには、ブレアの原始主義からアーノルド的伝統重視の洗練された規範への回帰がともなっていた。

こうした認識にたつ本論文は、ワーズワスの詩作のプロセスに作用したさまざまな文化的言説のせめぎ合い、とりわけ詩人ワーズワスと読み手の関係解明を目指した論考であり、また同時に、18世紀末から19世紀前半にかけてのイギリス文化の記述ともなっている。こうした企図により、本論文は、従来からあった「自然派詩人」とする固定したステレオタイプのワーズワス像ではなく、ロンドン下層階級の人々を驚愕もって見たことを契機に、政治的イデオロギーをもったワーズワスへ変貌をとげる過程を解明し、いわばワーズワスの「社会派詩人」像を提起したところに独創がある。

著者は、表題の「詩的・文化的転移」(Poetico-Cultural Transference)を、「想像的なるもの」(the imaginative)と「現実的なるもの」(the real)とのワーズワスという個における相互交渉と定義し、その時々での交渉の実態、またその交渉の描く軌跡を臨場感をもって記述している。さらに、著者は、ワーズワスを取りまく多様な文化、とりわけ「高級文化」に対抗する「低級文化」もしくは「民衆文化」に着目し、政治的・文化的イデオロギーはもとより、フェミニズムや帝国主義言説をもこの「民衆文化」の射程に収めているところに斬新さがある。

そうした記述のなかで、とりわけ印象的な箇所は、やはりワーズワスが、そのロンドン体験を詩にした過程の分析である。「乞食」の存在は、ワーズワス変貌の契機であったからである。また、スコットランド知識人とのワーズワスとの関係を論じた第9章と第10章も斬新で、とりわけベイリーとの影響関係の議論はすぐれている。さらに、第12章の成果もみごとなもので、著者は、ワーズワスの『リルストンの白鹿』とスコットの『最後の吟遊詩人の歌』の創作過程を対比させ、歴史的現実とフィクションとの弁別の曖昧さに

触れながら、いかにワーズワスが読者層を意識していたかを、論理的に、また説得力をもって論じ切っている。

こうした独創的な成果が認められる本論文ではあるが、望まれることがないわけではない。本論文の議論の射程としてフェミニズムや帝国主義言説への言及はあるものの、それが一般的な解説にとどまり、実質的な議論や分析が不足していること。さらに、各章の間の連携はわかるが、論文全体の構成的ヴィジョンが十分に明確であるとはいいがたいこと。こうしたヴィジョンと関係していることであるが、ワーズワスの詩作とその時々、文化的言説とのせめぎ合いが記述された結果、そこにどのような「転移」の軌跡が描かれ、それがどのような意味をもっていたかが十分に説明されていないことなどがある。

とはいえ、本論文が提示した新知見は、ワーズワス研究だけでなく、同時代にかかわる他の研究領域にも大きな貢献をなすものと判断する。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。